

第2回拠点を核とした産業集積及び周辺環境整備の課題に係る検討会

議事要旨

日時:平成28年3月24日(木) 15:00~17:15

出席者

浅間委員、家田委員、小沢委員、西郷委員、高橋委員、山名委員、近藤委員、安達委員代理、大谷委員代理、遠藤委員、白井委員、新居委員、竹田委員

議事概要

(1)プレゼン概要

資料2に基づきアトックス 上田常務取締役、西垣福島復興支社副支社長より「福島第一原子力発電所の安定化・廃炉と福島再生の最前線へ」について説明。資料3に基づき山内理事兼事業統括ディレクターより「産業集積のためのエコシステムをどう育てるか」について説明。資料4に基づき西郷代表取締役より「コミュニティによる生活文化拠点の創造」について説明。資料5に基づき浅尾代表取締役より「ロボットフィールドを核にした利用拡大の可能性」についてアニメ動画も交えながら説明。

(2)質疑及び自由討議

- ・作業員への不信感は、原子力関連だからというわけではなく、外部から来た知らない人に対する不安感という話と理解。その場合は、作業員も地元の自治会に参加して、住民と作業員がお互いのことを知るなどのやり方も考えられる。
- ・交通渋滞が発生して、従業員が大変な思いをしている。通勤の大変さを解消していくため、県としても本格的に取り組む必要があると考えている。関連企業なども含めて取組を水平展開して、外部から来る人にも市民にも快適な環境を整えていきたい。
- ・コミュニティカフェで、外から来た労働者と住民がコミュニケーションを取り、情報交換できれば不安は解消されると考える。そのためには快適な場所が必要。福島には豊かな自然があるため、それを取り込んだ快適な場の作り方や、建築ができると、人が集まってくるだろう。
- ・箱物ではなく、ソフト支援にきちんと目を向けることは素晴らしいが、こういったアプローチに、行政がどのように具体的な支援をできるかということが問われる。ぜひ行政としての具体案につなげてほしい。
- ・原子力災害、放射能汚染というハンディの下でも、住民が地元に住み続けたいという意思や、地域の誇りがある限り、復興の可能性は広がる。

- ・気合と根性で奇跡を起こすというのがヒーローアニメの本質。ヒーローはピンチにならないとやってこないため、「負のイメージ」は逆に可能性と捉えられる。乗り越える壁がないところにヒーローが来ないように、負のイメージがあるからこそ、コンテンツを作って新しいイメージを創出していこうという試みが考えられる。福島にはそういったコンテンツを生み出す可能性を数多く秘めている。
- ・その地域に難しさや課題があるからこそ意志を持つという人は必ずいる。実際に、放射能に関して正しい情報を伝えた上で、問題ないと判断する人が外から被災地に入ってきている。
- ・負であるからこそ他にない価値をここに作る、という想いが必要である。イノベーション・コースト構想も同じ考えに立って、福島であるからこそその産業、というものにしていく必要がある。課題に価値を見出す人を呼び込み、そういったモチベーションをファシリテートする政策を考えていただきたい。
- ・去年、情報交流拠点をつくる際に、ベンチャー企業の経営者に集ってもらい、将来のまちづくりについてプレストを行った。そういった人を様々なプロセスに巻き込んでいくことが有効。
- ・原子力災害復興特区ということで、地域を税制面、規制緩和、その他可能な限りの特区としての位置づけを認定できないか。
- ・外から人を集める仕組みを作らなければならない。今までは研究開発、技術や実証の場として考えてきたが、研究者でも快適さや娯楽的な要素がないとモチベーションが高まらない。付加的な価値の議論は今まであまりできていないため、どう作り込んでいくかも考えていくべきである。
- ・所属大学の3分の1以上は外国人留学だが、アニメが好きというきっかけで日本に来たという人が多い。アニメは、若い人を呼ぶきっかけづくりとして良いと考えられる。
- ・長崎県の軍艦島は、かつて約5300人が住んでいたが、シアターや病院、学校などすべてのファンクションが狭いところに集約されており、人々の生活は楽しそうであった。研究開発のみならず様々な機能が組み込まれている街であり、今後の検討の参考となるのではないか。

以上